

セキスイハイムM1 開発の狙い

セキスイハイムM1について、当時の著書「現代民家と住環境体」(SD選書)から引用しつつ、開発の前提となる考え方について当時を振り返ってみることにする。

戦後の混乱と住宅不足の状況に対して、1950年後半から公的なシステムも整備され大量に住宅供給が行われてきていたが、都市問題がそれに伴って顕在化してきた。

都市の混乱と破壊の問題、コミュニティの崩壊の問題や環境の問題も根本原因は同一で、社会システムの急激な変革に住宅の原型と生産システムの原型ならびに住環境システムの原型とが、対応しきれず大きなバランスの乱れを生じてしまったことに起因している。

国や自治体を含めた供給者がそれぞれの論理に基づき、一方的な供給が行われている一方で、出来上がった環境に受身のユーザーがいるだけで、変革に対応したダイナミックな環境作りを引き起こせない状況になっていた。

しかしそんな中で、成長から安定へ、生産から生活へと時代意識に変化が感じられるようになり、住宅と住環境の問題についても大切に考えていこうという風潮が出てきてきたことから、現代における原型の創出の可能性がすこしづつ見えてきた。それまでのような何があっても大量の住宅建設、つまりフロー作りを前提とした議論の時代から、良質な住環境ストックづくりをめざしたトータルシステムとして質とくに耐久性と、時間と住環境の変化にうまく対応しうるフレキシブルな住宅が求められはじめてきたことが、セキスイハイムM1にいたる取組みの重要なきっかけになっている。

過去において、民家は村々の自然環境と、コミュニティと素材の生産力と人々の労働力のバランスの中で超時間・超空間的にバランスのとれた形で合理的にかつ創造的に作りあげられてきた。急激な変化の中で忘れられていたプロトタイプとしての民家とその集落づくりのシステムの中に、生活と技術の原型すなわち「建築」の方法の原型を発見して、よりよい住空間、住環境体をつくりあげていかねばならないと考えた次第である。

住宅と住環境づくりの方法の再出発点としては、プロトタイプとしての民家のもつ方法論を現代の高度に発達したシステム技術、工業化技術を利用して「現代民家」のシステムを構成していくことが必要だった。

供給数ばかりを考えずに、その住宅の質の問題、とくに耐久性と時間変化に対するフレキシビリティのレベル、すなわち社会的住宅ストックとしての価値のレベルでとらえなければ意味がない。さらに人間の住意識レベルも向上してくるので、段階的なレベル向上や住み替えなどによるフレキシビリティの社会的システムが必要であり、かつ社会的システムは複雑なダイナミックモデルの集合として動くので、過去、現在、未来にわたった住環境理念のアイデンティティがないとますます混乱と無駄をくりかえすことになりかねない。

工業化技術は、かつて生産者論理を一方向的に押付ける原因と見られていたが、一層の進歩に伴い運用のしかたによってはあたかも生態的な、多様性と地域性とを十二分に発揮しながら工業化メリットを確保しうる、人間のための工業化技術の可能性がではじめていた。

以上のような背景と考え方のもとに、高度に生産工程を工業化することが可能なユニット工法をベースにして作った住宅供給システムが、セキスイハイム MI である。

このシステムで実現させたこととして、一つは、それまで生産者側の論理に基づくことで施工組織と材料供給が階層化され、それが原因で上昇するコストについて、できる限り工程と材料調達を工場に集約することで低減する一方で、その差額の一部を使いストックに耐える性能と品質を備えさせたこと、そして二つ目は、基本的には無目的の空間で、かつ一つのサイズしかないユニットを組み合わせるという単純なシステムとすることによって、居住者自らが建設のプロセスに関われる住宅供給のシステムを構築したことである。そして、個々の居住者がこのシステムを使いこなせるようになり、状況の変化にダイナミックに対応できることで社会ストックが形成され、それによって良好な住環境を創出することが本来の狙いであった。

大野アトリエ一級建築士事務所 所長 大野勝彦

経歴

1944 年 福島県生まれ

1967 年 東京大学建築学科卒業

1972 年 同大学院内田研究室「部品化建築論」で工学博士

1971 年 大野建築アトリエ一級建築士事務所開設、ユニット住宅設計、

町づくり設計、都市型ハウジング設計などで活躍

著書

「現代民家と住環境体」鹿島出版会、「地域住宅工房のネットワーク」彰国社、

「現代の十九ー七つの町づくり設計」丸善、

「JKK ハウジング大学校講義録」(共著)小学館スクエア、ほか